

通 過 ・ 不 通 過									
新 版 K 式 発 達 検 査 を め ぐ っ て					そ の 2				
					大 谷 多 加 志				

前回から「新版 K 式発達検査をめぐって」をテーマに連載を開始しました。私の仕事の1つである「新版 K 式発達検査」についてご紹介し発達検査について対人援助に携わる方に広く知って頂くこと、また発達検査と対人援助の共通部分について考えてみたいということが、連載の意図でした。今回が 2 回目、未だ手探りの感覚がありますが、焦らずに自分が日々発達検査に携わる仕事をする中で感じていることを丁寧に言葉にしていく機会にできればと思っています。

通過・不通過

発達検査、知能検査にはたくさんの種類があります。またそれぞれの検査は数多くの検査項目(下位項目と言ったりもします)から構成されています。それぞれの検査の持つ「発達観」「知能観」に基づいて、発達や知能を多面的に捉えるために、道具を扱う課題、言葉を用いる課題など、多種多様な検査項目が用意されているわけです。

各課題をクリアしたことをどのように表現

するかは、検査によって異なります。「正答」「誤答」のような表現もありますし、「合格」「不合格」という表現もあります。新版 K 式発達検査では、1983 年に発行された新版 K 式発達検査増補版では「合格」「不合格」という表現が用いられていました。しかし、2002 年、新版 K 式発達検査 2001 に改訂された時に、「通過」「不通過」と表現が変更されました。1つ1つの検査項目について「通過基準」を設け、基準をクリアするような反応が見られた場合、その項目を「通過」とします。逆に、基準に合致しない反応の場合は、その項目は「不通過」と判断します。

この「通過」「不通過」という表現が、私はとても好きです。「通過」という言葉からはあるところを通過した後の、その先にあるものが見えてきますし、「不通過」からは通過点までの道のりが見えてくるような気がします。ある1点で評価を二分しなければいけないというのは検査として仕方がない部分なのですが、「発達」は簡単に二分して考えられるようなものではありません。新版 K 式発達検査の「発達を連続体とし

てとらえる」という姿勢が、この「通過」「不通過」から伝わってくるように思います。

通過・不通過をめぐる

話が少し変わりますが、検査の講習会ではこの項目の「通過」「不通過」が、1つの大きなテーマになります。判断の基準はマニュアルには示されているのですが、実際の子どもたちの反応というのは本当に多様です。そもそも考えてみると、検査の基準となる標準化のデータは 2677 名の協力者の検査結果がもとになっているのですが、臨床の場に行われている検査の数は、当然それをはるかに超えていることでしょう。標準化の時には想定しなかったような反応が出てくることも、十分に考えられます。講習会では、マニュアルの基準だけでは判断に迷うような反応について「これは通過ですか？不通過ですか？」という質問を数多く受けることになるわけです。

原則的にはマニュアルの基準に則してご質問の内容を吟味しながら答えていくのですが、それでもなお、判断に迷うことはあります。例えば、描画に関する課題では、「線の間隔は〇cm 以下であること」や「角 A の角度は 90° 以下であること」など、かなり厳密な基準が設けられているものもありますが、 90° と 90.1° を見分けることは事実上不可能です。形は違っても、他の項目でもこのような見分けがほとんど困難な反応に出会うことは、やはりあります。自分が検査者の時は、最後は自分の

責任で「えいやあ！」と判断するのですが、講習会というフォーマルな場で、質問に応じるという形になると、まったく違った緊張が走ることになります。この際の「通過」「不通過」の判断は、当然検査結果（発達年齢や発達指数）に影響しますので、特に行政の場で判定業務に携わる方にとってはシビアにならざるを得ない問題だと思えます。

マラソン

最近、「通過」「不通過」という言葉から、マラソンのチェックポイントをイメージするようになりました。20km 地点、30km 地点にチェックポイントがあつて、22km まで走った人がいたとしたら、その人は 20km 地点は「通過」、30km 地点は「不通過」です。

先ほどの「通過」「不通過」の判断が難しい反応をマラソンに例えると、20km 地点まであと 1m のところの人と 20km 地点を 1m 過ぎた人とを比べているような話に思えてきます。20km と 1m 走れた人が明日は 20km に到達できないということも起こりそうですし、今日は 20km に 1m 届かなかった人が明日は 20km に到達することも、十分起こりそうです。そういう意味では、今日の記録では 20km 地点を「通過」「不通過」と結果が分かれましたが、走力に本質的な違いがあるとは必ずしも言えないように思います。

一方で、21km まで走れた人と 29km まで走れた人が同じように 20km 地点は「通

過」、30km 地点は「不通過」となる場合もあります。この時は「通過」「不通過」の記録は同じでも、両者の間に力量の違いがあるかもしれない、と考える必要があるかもしれません、と考える必要があるかもしれません。

「通過」「不通過」はもちろん重要な判定です。しかしそこはあくまで発達をとらえるための1つの点、チェックポイントです。不通過から通過に至る過程や、さらにその先に続く道にも目を向けていくことが大切だと思います。

ペースメーカーがいれば

先に提示したような「通過点を超えたか微妙」という反応以外にも、判断に迷う反応に出会うこともあります。

講習会などでよく受ける質問の1つが、「定められた手続き実施した時は不通過になるけれど、〇〇という条件にすると通過できるという場合、どう判断したらよいか？」というものです。

先ほどのマラソンに例えて考えてみます。普通に走ると 20km にも届かずリタイアしてしまう人がいたとします。ただ、この人の横をペースメーカーが並走すると、20km はもちろん 42.195km を完走することまでできてしまうのです。質問の形式に合わせて「普通に走ると 20km も走れないのですが、ペースメーカーと一緒に走れば完走できる人がいたのですが、この人の走力をどう理解すればいいのでしょうか」ということになります。

マラソンを走る上で、ペースを作ることは

非常に大切です。いくら体力や脚力がずば抜けている人でも、後先を考えずにスパートを繰り返していればすぐにバテてしまうでしょう。マラソンを走る力は、単に体力や脚力を足し合わせたものではなく、それを最大限に発揮できるようなペース作りの力も含まれる、総合的な力だと言えるでしょう。

仮にペースメーカー並走でよい記録を出せる選手がいたとしても、その記録をそのまま実力と受け取ってマラソン大会に送り出すことはできません。自分でペースがつかめるようなトレーニングが必要かもしれませんし、場合によってはその人が実力を発揮できる距離に種目を変更することも1つの手かもしれません。

話を発達検査の場面に戻すと、「〇〇の条件ならできた」という時、そのまま無条件に「通過」とは判断できないと思います。「〇〇の条件で試してみよう」という発想は、検査者の臨床的なセンスによるものです。それだけに、その試みから得られる情報は非常に有益です。マラソンの場合と同じく、パフォーマンスを左右した「条件」について考えることが、子どもの特性に合わせた配慮や支援につながっていくように思います。

発達を総合的に捉える

発達検査で理解しようとしている子どもの「発達」も、マラソンの場合と同様に「総合的な力」であると考えています。初めて知能検査を作成したビネーの知能観につ

いて、松下・生澤（2003）は次のように述べています。

「19 世紀に自然科学がおさめた成功のもとで、当時の社会では要素還元主義的な世界観が支配的であった。そのような世界観を反映して、人間の精神作用も感覚や知覚、あるいは反射速度など単純な心的過程に分析できると考えられた。しかしビネーは、単純な心的作用を厳密に測定してそれを総合しても、人間の高度で複雑な知的活動をとらえることはできないと考えて、判断力、注意力、推理力というような複雑な知的活動そのものを測定しようとした。ビネーはそれらの知的活動のサンプルになるような、日常的で、具体的な知的作業を広く集め、それを実際にやらせてみる、という方法をとった。」

この考え方と手法は、新版 K 式発達検査にも受け継がれています。「〇〇ができないのは××だから」というように人間を単純化して考えない姿勢は、子どもに限らず、人間を理解しようとするときに欠かせないものだと思います。

引用文献

松下裕・生澤雅夫（2003）
新版 K 式発達検査（1983 年版）から
新版 K 式発達検査 2001 へ
京都国際社会福祉センター発達療育研
究 2003.5 別冊